人なのにボット

都恵司

　でもさぁ、今時、ハードディスク上に保存って古くない？　クラウド化って知ってる？　これからはそういう時代らしいよ。私の携帯はフラッシュ動画も見られる機種だし、お姉ちゃんみたいにそんな面倒なことしない。

　理乃はわりと合理的な性格である。だから、件の炎上があってからもその前からも正アカウントの「りのりー」でつぶやく回数はさほど変わらない。たまに他のフォロワーからは「りのちゃんのアカウントって人なのにボットみたいだよねー」と揶揄されたりするが、あまり気にしていない。規則正しい生活を送っているからボットのようになるだけなのだ。ただそれ以来表現に気を使うようになって実は少し気にしているのかもと理乃は自覚した。
【ririnoko
　起床なう】
【ririnoko
　就寝なう】
　人なのにボットと指摘されてから、
【ririnoko
　今日も清々しい朝ですね。でも今日は昼から雨らしいですよ】
【ririnoko
　今日覚えたことわざは血で血を洗うです。明日も良い日になりますように】
　こんな風に変わった。ただ、まだどこか心もちボットのようなツイートかもしれないと理乃は思っていた。

　せっかく姉の弱みを手に入れたのだから、利用しない手はない。理乃は早速、メールで姉を近所のコンビニまで呼び出した。
《お姉へ　ルーソンで待ってるから十分以内に来てね。でないと……》
　理乃はアイスをおごってもらいながら、良子から父らしき人物のアカウントについて話を聞いた。理乃が話そうとしていたことは後回しだ。
「何かね。親父みたいなの。でも、ばれる筈がないわ。ネットは広い海みたいなものだもの。でも、なんでわかったんだろう」
「ああ。それはね。お姉ちゃん知らないの？」
「知らないのって。あんたが言ったの？」
「んなわけないじゃん。なんか五月くらいに一時的あったテスト機能だよ。私もだけどお姉ちゃんもWIFIでネットしてるでしょ。ツイートしてるでしょ。３Gの電波は糞だし」
「WIFIの方が早いもんね」
「ところがそれが問題なの。一時的にIPによってツイッターのアカウントにお勧めが表示される期間があったんだよ」

「嘘ぉ！」
「お姉ちゃんに嘘ついても仕方ないでしょ」
　なんて理乃は言うのだが、普段から理乃は良子に嘘ばかりついていた。良子ほど気持ちよく騙されてくれる人はいない。単純で人を疑うことを知らない良子はいつもほいほい騙されていた。
　例えば、さきほどルーソンで待ち合わせをしてアイスを買うときも、良子は面白いほど騙された。理乃が、わざとやってるんじゃないかとたまに疑うくらいの信じようだ。
「ねーねー。お姉ちゃん。なんでわざわざお父さんの動画見てたの？」
「うごっ。ばっ。こんっ」
「ごめんごめん。そんなに慌てなくても。でも、あーゆー動画ならネット上にごろごろ転がっているよ？　わたしもう飽きちゃった」
　実際理乃がそういう動画を見たことはない。しかし、良子は信じたようだ。顔色がくるくる変わった。
「お姉ちゃんに嘘なんかつくはずないでしょ」
　理乃はしれっと言う。嘘だった。狼少女にならないぎりぎりのラインで理乃は良子をからかって遊ぶのが好きだった。

　アイスを食べ終えたら、自販機でお茶を買った。
「それで、何か用があって私を呼び出したんじゃないの？　嘘吐きの理乃ちゃん？」
「ごめんって。もう。そんなに怒らないでよ」
「はいはい。それで」
「何か、生きているつぶやきってどんなのかなって思って」
「はぁ？」
　良子は首を傾げた。理乃は言葉足らずを自覚して付け足した。
「ええと。ボットみたいじゃないつぶやきってどんなのかな」
「むしろボットみたいなつぶやきを見てみたいわよ。ふっつーにつぶやいてたら、ボットみたいになんかならないと思うけど」
　理乃は姉の無神経さに哀しくなった。
「……普通につぶやいていて、まるでボットのようだと言われるの」
　そう言うのはたぶん、お姉ちゃんみたいに思ったことをそのまま言ってしまうような人なんだろう。どうしようもなく無神経で人の心の中に土足で上がり込んでくるような。
「あ、そうだったの。ふぅん」
「どうでも良さそうだね。お姉ちゃん」
「うん」
　理乃は相談する相手を間違えた。ここは一度引き返して再度相談する相手を見つけようと考えた。姉にもう帰っていいよ、と告げたら少しキレた。

「えー！　あんたが呼びだしたんじゃん。あほりの！」

　公園からその足で静香の家に行く。
　まだペットを決めていないらしく、冷蔵庫に候補を書いた表が貼ってあった。
「とかげ、犬、猫、牛、豚、鶏、魚。うーん」
「途中から食べられるのになってるでしょ。飼ったら食べられなくなるのにね」
　食べられなくなるというか、どうやって牛や豚を一般家庭で捌くのだろうと理乃は疑問に思った。
　静香はまだツイッターを始めていないので、少し迷ったが聞いてみることにした。自分にはあまり合わないんじゃないかなと以前言っていたのを覚えている。
「相談なんだけれど、ボットみたいと言われないようにするにはどうすれば良いと思う？」
「ぼっと？　湯沸かし器って言われてるの？　クラスの男子から？」
　首をかしげながら静香は心配そうにこちらを見た。
「それはポットだ。いじめられているとかじゃないので心配しなくても大丈夫。ボットというのはツイッターの機能のひとつで、あらかじめ登録された言葉を自動的に機械が選んで定期的につぶやくというものなんだけど」
「あ、なんか聞いたことあるような。え、りのちゃんがそう言われているの？　ひどいこと言う人もいるんだね」
　理乃は感動する。欲しかったのはこういう返答だ。静香なら何か良い案を考えてくれるかもしれない。携帯を取り出して「りのりー」のタイムラインを見せる。
「おおー。これがりのちゃんのつぶやき。へー。覚えたことわざとかも書いてあるんだ。偉い。楽しそうだね」
「使い方を間違えなければ、ね。静香もやってみたら。フォローするからしてよ」
「考えとく。でも、これのどこがボットなの？　どこからどう見ても、りのちゃんのつぶやきだよ。だって、このことわざのチョイスとか、簡潔に言いたいことだけちゃんと書いてあるところとか、すっごく、りのちゃんらしいと思うんだけど」
「ありがと」
　理乃は少し泣きそうになるくらい嬉しかった。自分らしいと言われることがとても。
　そもそもツイッター上で「りのりー」をフォローしている人たちはほとんど、実物の秋野理乃を知らない。だから、機械のようだと簡単に言ってしまうのも仕方がないのかもしれない。
「どういたしまして。そうだ！　アイスあるけど食べる？」
「さっき食べてきたとこなの。お姉ちゃんにおごってもらった」
「えー。いいなー。うらやましい。優しいお姉ちゃんだね」
「いや、まぁ。正しく言うなれば、脅して奢ってもらったんだ」

人なのにボット

http://p.booklog.jp/book/33179

著者 : 都 恵司
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/123miki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33179

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33179

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.